

絶滅危惧Ⅰ種の淡水魚

カワバタモロコ繁殖

県水産研究所（鳴門）成功

国のレッドデータブックで絶滅危惧Ⅰ種に指定されている淡水魚カワバタモロコの繁殖に、徳島県水産研究所（鳴門市瀬戸町）が県内で初めて成功した。県内では2004年、生息が58年ぶりに確認されたものの、以後は見つかっておらず、研究所が07年から保護・繁殖に取り組んでいた。研究所は今後も繁殖条件などを研究して個体数を増やし、自然の中での繁殖を復活させたい考えた。



カワバタモロコの繁殖が確認された屋外水槽
鳴門市瀬戸町の県水産研究所

研究所は当初、卵子を成熟させるホルモン注射を試したが、うまくいかなかった。10年度からは、育成環境を自然に近づける飼育法に転換。飼育水槽を屋外に移したところ同年7～9月に計262匹の繁殖に成功した。11年も5月末、10年に生まれた個体を含む約250匹を六つの水槽に分け、屋外での飼育を開始。10年より多くの繁殖を目指している。

屋外水槽飼育が効果



県水産研究所が繁殖に成功したカワバタモロコ
鳴門市瀬戸町の同研究所

西岡智哉主任研究員（20）は「太陽光にあたる時間が産卵に影響しているのでは」と推測しており、「1匹でも多く繁殖させ、できるだけ早い時期に、もともと生息していた地域に返したい」と話している。

カワバタモロコは1946年に石井町で生息が確認されたとの記録が残っているが、その後は十分な調査もされないまま、絶滅したと考えられていた。2004年に鳴門市大津町の水路で生息が確認され、このとき採取した個体を県立博物館が飼育。研究所が07年に譲り受けた。（萬木竜一郎）

カワバタモロコ 体長3～6センチのコイ科の小型魚で日本固有種。静岡県より西の本州太平洋側、四国、九州の平野部にある河川や水路などに

生息している。コンクリート張りの河川改修が進んだことや、ブラックバスなどの外来魚が侵入したことなどにより、全国的に数が減少している。